



図書館だより

2月

NO.10

2月、一年中で寒さがもっともきびしい月です。昔の呼び方では、「如月」と言って、「衣更着」「着更着」とも書いたそうです。寒さがきびしいので、さらにもう一枚重ねて着る月ということでしょう。でも本当は「生更ぎ」で草木が更生（生きかえる）する月。冬の間ねむっていた草木が芽ぶき始めて「春立つ」季節となるのです。他に2月のことを雪消月、早緑月、梅見月、仲春、春半ばとも呼ばれるように、どれも春を心待ちしていることが分かります。そして、4日は立春。暦の上ではもう春です。立春のあと、初めてふく強い南風を「春一番」と言います。今年の春一番はいつ来てくれるでしょうね。 春よ来い！早く来い！

2012/02/01

ノートルダム学院小学校図書館



雪は天から送られた手紙

この冬は例年になく雪が多く、雪に関する注意が毎日のように呼びかけられています。雪による事故も多いです。日本の国土の半分は降雪地帯なので、昔から雪と生活する工夫をしてきました。雪国のくらしの今と昔を調べてみませんか。雪のことを「六花」（雪の結晶の形から）、「天花」（天上の世界に咲く花）とも言うそうです。美しい呼び名ですね。雪の美しさにひかれて、雪の研究をした人は昔からたくさんいました。日本の中谷宇吉郎もその一人。宇吉郎は雪国・石川県片山津に生まれた人で、雪の結晶の写真をとり、18の種類に分類しました。そして世界で初めて研究室で人工雪を作ることに成功した人です。「雪は天から送られた手紙」という有名なことばを残してくれました。

雪について、古くは紀元前150年ころ中国の韓詩外伝には、「木や草の花の多くは五角形であるが雪は正六角形である」と記されているそうです。1611年ヨハネス・ケプラーは雪が正六角形であることを発見して「六角形の雪の新年の贈り物」という小さな本を友だちに送っています。1901年ウイルソン・ベントレーは雪の結晶のけんび鏡写真を発表しました。この本は図書館にもあります。その後も研究は続き、1983年スペースシャトルチャレンジャー号で雪の結晶作りを、2008年には日本の実験棟「きぼう」で結晶が成長していく様子を遠隔操作で観察しています。研究は宇宙まで広がっているのですね。

- 「雪の写真家ベントレー」
マーティン BL出版
- ・「雪の一生」
片平孝 あかね書房
- ・「雪国のくらし」
次山信夫 ポプラ社
- ・「雪のかたち」
片平孝 フレーベル館
- ・「雪国のくらし」
市川健夫 小峰書店

6年生のみなさんへ

この6年間、みなさんにとって、図書館は、どんなところだったでしょうか。図書返却を2月中に完了しましょう。 ” 発つ鳥あとをにごさず ”